



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1. 北海道大学所蔵・中里遺跡の収集資料について
Author(s)	中沢, 祐一
Relation	北海道大学所蔵中里遺跡（置戸町）収集考古資料 = A Catalogue of the Prehistoric Artifacts from the Nakazato Site, Oketo Town, Hokkaido, Japan / 中沢祐一, 矢原史希編集・執筆
Issue Date	2017-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67596
Type	book part
File Information	04ArtifactsNakazato_1-8.pdf



1. 北海道大学所蔵・中里遺跡の収集資料について

(1) 調査の経緯

北海道大学が所蔵する中里遺跡の考古資料は、児玉作左衛門博士（当時、北海道大学医学部教授）および大場利夫博士（当時、北海道大学医学部講師）の学術調査によって、北海道常呂郡置戸町中里地区に所在する遺跡（以下、中里遺跡と呼称）より収集された石器を中心とする遺物である。この置戸町における学術調査は、地元の郷土史家の遺物収集を契機とする。すなわち、置戸町の藤川^{なおい}尚位氏⁽¹⁾、松田恒正氏、美幌町の加藤正氏らが、当時地元で収集していた石器の特徴が、旧石器時代の石器の特徴と類似することに注目し、根室の郷土史家であった伊藤初太郎氏の助言に従い、置戸町から北海道大学の児玉博士と大場博士へ遺跡調査を依頼した（大場 1957、置戸タイムス 昭和 32 年 8 月 29 日記事）⁽²⁾。児玉・大場両博士を中心とする北海道大学医学部解剖学教室は、1956 年（昭和 31 年）および 1957 年（昭和 32 年）の 2 ヶ年にわたり、置戸町内に分布する旧石器時代の遺跡発掘調査を実施した。昭和 31 年の調査は北海道大学が主体であったが、翌昭和 32 年は大場博士を中心としつつも、置戸町郷土研究会、置戸町同好グループ、置戸町教育委員会などを含む町民が組織的に参加した（第 1 表）。

北海道大学大学院医学研究院人類進化学教室では、2016 年度（平成 28 年度）より、置戸町収集考古資料の学術資料化へ向けた整理作業に着手した。調査時の図面が残されていないことから、トレンチの位置など正確な発掘場所を特定することは困難であった。一方で、遺物は箱へ収納された状態で保管されていた。箱のラベルには、遺物が由来した調査地点の土地所有者名に加え、収集年月日、発掘された「地区」・「地点」、発掘および表面採集などの、資料が収集された背景などが記録されていた。収集された遺物は土地所有者の名称ごとに区分されていた。このような保管状態を考慮し、本整理作業では、遺物を収納していた箱のラベルに記録されている情報（収集年月日、収集場所など）の整理から開始した。遺跡の場所を特定するために、調査が実施された 1950 年代の地区名および土地所有者名などを基に、地元の新聞（置戸タイムス）に掲載された記事の内容を参照し、調査地点を推測した。また、当時の所有者の土地に対応すると考え

られる現在の遺跡名は、北海道教育委員会が作成し公開している遺跡台帳（北海道教育委員会 2017）によって確認した。その結果、以下の点が明らかになった（第 1 表）。

1. 1956 年と 1957 年に北海道大学医学部が調査した地域は 3 地区である。常呂川の下流より、中里地区、安住地区、勝山共栄地区となる。

2. 中里地区は谷崎^{ひでじ} 秀治氏、後藤政雄氏、梶大吉氏、安住地区は後藤利雄氏、勝山共栄地区は後藤円太郎氏の土地である。

①谷崎秀治氏の土地は、現在の中里遺跡に相当する。

②梶大吉氏の土地は、谷崎氏の土地の西側に隣接する墓地の沢川に面した場所である。

③後藤政雄氏の土地は、置戸町では「熊谷^{くまがい} 台地」という通称であった（田村昌文氏の御教示による）。この土地は、墓地の沢川が常呂川と合流する地点に向かって南に張り出した台地上にあり、田付^{たつき} 遺跡という名称の遺物包蔵地が位置する。発掘調査された後藤政雄氏の土地は、田付遺跡に該当する可能性が高い。

④後藤利雄氏の土地は、安住遺跡に該当する。これは、北海道大学医学部が発掘調査した後の 1962 年に、明治大学考古学研究室が発掘調査した「置戸安住遺跡」（戸沢 1967）と同一の遺跡である（大場・松下 1965）。

⑤後藤円太郎氏の土地は、勝山共栄地区に位置し（田村昌文氏の御教示による）、勝山 3 遺跡に該当する可能性が高い。

⑥調査された遺跡ごとに遺物を区分した結果、谷崎秀治氏の土地（中里遺跡）、後藤利雄氏の土地（安住遺跡）、後藤政雄氏（田付遺跡）については対応する遺物が明らかとなった。

⑦勝山共栄地区（後藤円太郎氏の土地にある遺跡[勝山 3 遺跡]）に関しては、北海道大学医学部においては該当する遺物が確認できていない（2017 年 9 月現在）。

第1表 調査期間、土地所有者、遺跡名の対応

調査年	調査期間	土地所有者	遺跡名 (当時)	遺跡名 ^a	図 番 号	発掘者	出典
昭和31年 (1956年)	8月17日 ～25日 (期間 A) 8月20日 ～27日 (期間 B)	谷崎秀治	谷崎遺跡	中里遺跡	1	大場利夫を 含む北大4 名(置戸タ イムス記 事より児 玉作左衛 門は24・ 25日に 視察)	期間A は、児玉 から置戸 町への手 紙より推 測 期間B は、置戸 タイムス (昭和31 年8月30 日)の記 事より推 測
		後藤利雄	安住	安住遺跡	2		
		後藤政雄	「熊谷台 地」	田付遺跡	3		
		不明	「火葬場 横」	置戸墓地 遺跡	4		
昭和32年 (1957年)	8月17日 ～20日	谷崎秀治	谷崎遺跡	中里遺跡	1	大場利夫・ 遺跡調査 班・郷土研 究会(三浦 教諭ほか10 数名)	調査期間 と発掘者 の記述 は、置戸 タイムス (昭和32 年8月22 日、29 日)の記 事より推 測
		後藤政雄	「熊谷台 地」	田付遺跡	3		
	8月21～ 23日	後藤円太郎	勝山共栄	勝山3遺 跡	5	大場利夫・ 遺跡調査 班・置戸町 同好グルー プ・置戸町 教育委員会	
不明	不明	梶 大吉	中里(梶)	対応なし	6	不明	箱ラベル より推測

図番号は、第1図の番号に該当する。a:遺跡名は、「北の遺跡案内」(北海道教育委員会)の名称に準ずる。

(2) 遺物 ID について

個別の遺物には、資料登録のための ID をつけている。遺物 ID は6種類の項目からなる。それぞれの項目ごとにコード化し、組み合わせている。第2表に、ID を構成する6種類の情報の詳細を示す。調査当時は置戸町の旧石器時代の遺跡は、「置戸遺跡群」という単位で把握されており(大場・松下1965)、遺跡群を構成する個別の遺跡名は明確に決定されていなかったようである。上述したように、資料が由来する遺跡を所有していた地主名が明らかである場合が多いため、所有されていた土地(畑)の位置から、北海道教育委員会に登録されている遺跡名、およびその

遺跡が所在する地区名をたどった。また当時のラベルに「地区」や「地点」が付与されている。

「地区」は、異なる土地所有者間で重複がみられることから、調査時に任意に設定した調査範囲であったと考えられる。「地点」は、「地区」および土地所有者の畑に含まれる小さな調査単位であり、実際に遺物が確認された場所と考えられる。1962 年（昭和 37 年）に置戸安住遺跡の発掘調査で採用されていた記載法（島田・山科 1999、戸沢 1967）を参考とすると、「地点」は、発掘調査区（トレンチ）の中で特徴的な石器や遺物が集中して出土した箇所（遺物集中域）を示す用語であった可能性もある。それぞれの地点には、発掘された資料と表面採集された資料の二種類が区別できる。本書が対象とする中里遺跡は「第二地区」であり、その中に「A～F 地点」と呼ばれる 6 つの地点を含む。これらの情報を組み合わせた、遺物 ID の種類は多岐にわたる（第 3 表）。なお、「地点」によっては「1 層」や「2 層」などの「層位」の記載をもつ資料があり、全遺物の 61%（2803 点）を占める。大場・松下（1965：182）の記載を参考とすると、地表面に接する 15-20cm の黒色層が「第一層」、その下の 25-30cm の褐色土層が「第二層」とされる⁽³⁾。層位の情報は、遺物 ID には含めていない。

第 2 表 遺物 ID の種類

	意味
地域	資料が由来する遺跡が位置する市町村名。
地区	資料が由来する地区。現市町村の中に含まれる。
遺跡（所有者）	資料が由来する遺跡の名称、または資料が収集された場所の土地所有者。もしくは、資料が収集された場所の資料収集時の名称。
地区・地点	調査者が任意に設定した、資料が収集された遺跡の中の場所。「地区」の下位に「地点」が含まれる。
コンテキスト	資料がどのような経緯（発掘、表面採集など）で収集されたかを示す。
遺物の通し番号	上記 5 種類の情報の下に含まれる遺物の番号。

第3表 中里遺跡収集資料の遺物 ID の種類

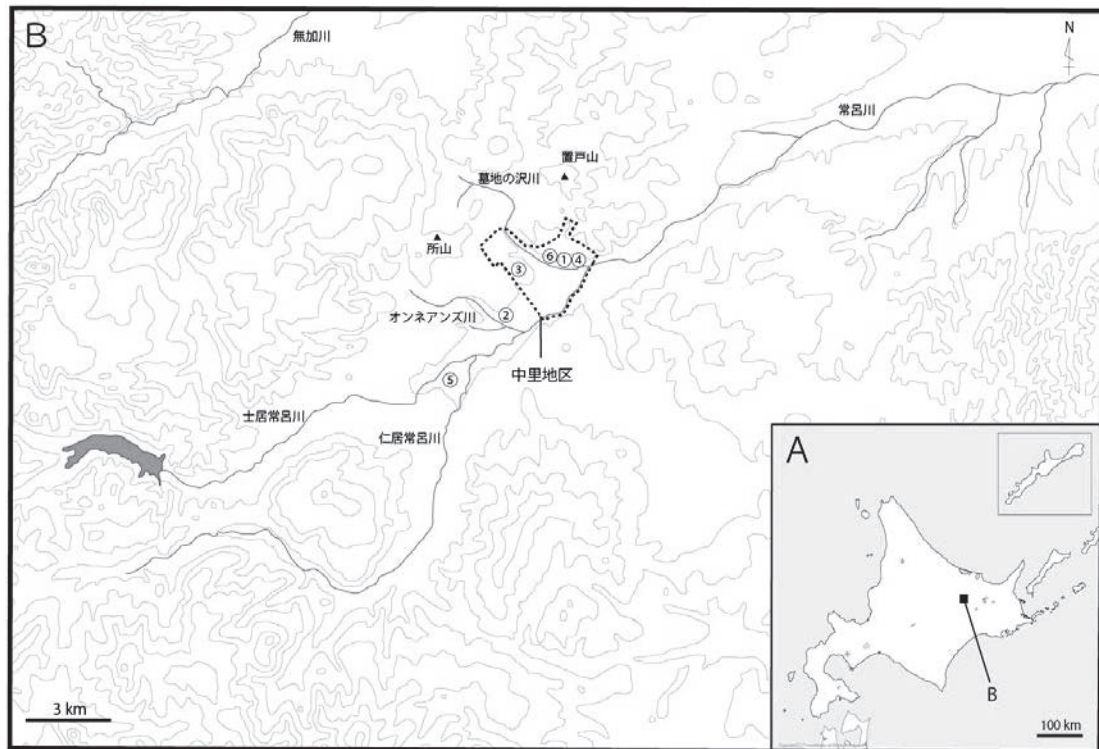
地域名	地域コード	地区名	地区コード	遺跡（所有者）	遺跡コード	地点（地区・地点）	地点コード	コンテ クスト コード	コン テク スト コード
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区 A 地点	1	発掘	1
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区 A 地点	1	表面採集	2
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区 B 地点	2	発掘	1
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区 C 地点	3	発掘	1
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区 D 地点	4	発掘	1
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区 E 地点	5	発掘	1
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区 F 地点	6	発掘	1
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区地 点不明	99	発掘	1
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区地 点不明	99	表面採集	2
置戸町	1101	中里	02	中里（谷崎秀治）	03	第二地区地 点不明	99	不明	99
置戸町	1101	中里	02	中里（梶）	04	地区地点不明	99	不明	99
置戸町	1101	中里	02	墓地の沢	05	地区地点不明	99	不明	99
置戸町	1101	中里	02	右の台地	06	地区地点不明	99	不明	99

（3）遺跡の位置（第1図）

中里遺跡（谷崎氏の所有地）の位置する置戸町は、北見盆地の南西部に位置し、オホーツク海へ注ぐ一級河川である常呂川の上流域に位置する。石狩山地の三国山から発する^{しい}士居常呂川（常呂川本流）は、置戸町の勝山地区にて^{にい}仁居常呂川と合流し、緩やかな蛇行河川となる。常呂川の両岸には河岸段丘が形成されており、山林や畑として造成されてきた。中里遺跡の位置する中里地区は、常呂川の支流である墓地の沢川が常呂川の本流と合流する地帯であり、段丘上の土地は牧草地や畑地として利用されてきた。北海道大学医学部が調査した昭和30年代初頭にあっても常呂川流域の土地は開墾が進んでいた。とくに中里地区は、明治40年（1907年）に広島

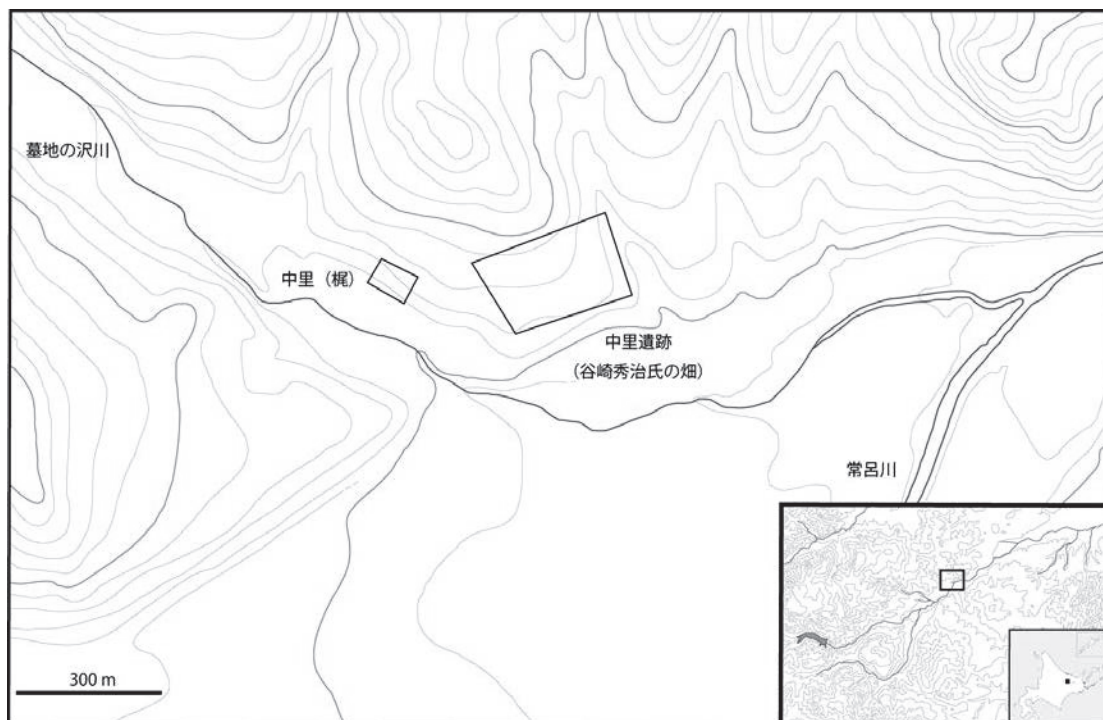
県の団体移民によって開拓された地区である（置戸町史編纂委員会 1957）。

中里遺跡は、墓地の沢川に面する南向きの台地上に立地する（第1図①、第2図）。保管されている遺物の中には、「中里右台」という名称が書かれたラベルを伴う遺物箱があり、常呂川からみて右の台地の意味と解釈すれば、中里遺跡を示す可能性がある⁽⁴⁾。中里遺跡の近隣には、「中里（梶）」地点、「火葬場横」と呼称されていた地点がある。収集時期や経緯は不明であるが、「中里（梶）」は梶大吉氏が所有していた畑である。中里遺跡よりも墓地の沢の上流方向に位置し、川に面した台地の低い箇所に立地する（第1図⑥、第2図）。「火葬場横」は、新聞記事（置戸タイムス 昭和31年8月30日記事）に記載がある地点であり、置戸墓地の横にある置戸墓地遺跡（遺物包蔵地、時期不明）が該当する可能性がある（第1図④）。墓地の沢川を隔てて中里遺跡の対岸の台地は後藤政雄氏の土地であり、田付遺跡として登録されている（第1図③）。常呂川の支流であるオンネアンズ川の左岸の台地には後藤利雄氏が所有していた畑があり、安住遺跡となる（第1図②）。後藤円太郎氏の所有する土地は、仁居常呂川が本流の土居常呂川と合流する勝山地区にあり、現在の勝山3遺跡が該当する（第1図⑤）。



第1図 常呂川流域と中里地区

A：北海道と資料収集地（B）の位置 B：常呂川上流域と調査地点の位置
 国土地理院2万5千分の1地形図をトレースして作成。図中の番号は、第1表の遺跡名と対応する。
 ①中里遺跡、②安住遺跡、③田付遺跡、④置戸墓地遺跡、⑤勝山3遺跡、⑥中里（梶）



第2図 中里遺跡（谷崎秀治氏の畑）および中里（梶氏の畑）の位置

国土地理院2万5千分の1地形図をトレースして作成。右下の地図は、第1図に相当。

注

- (1) 藤川尚位氏は、置戸神社宮司の傍ら、置戸町内の考古遺跡の記録や遺物収集を継続的に行った在野の郷土史家であった。置戸町より収集した石器の観察に基づいた技術的な研究も進めており、北海道大学医学部による調査の数年後には、「置戸遺跡出土の擦痕石器の実例と細石核について」という題目の研究論文（藤川 1959）を発表した。この論文を契機として、1962 年（昭和 37 年）の明治大学考古学研究室による安住遺跡の調査がなされたという（置戸タイムス 昭和 55 年 10 月 16 日記事）。大場利夫博士とは交流があり、北海道大学医学部の調査でも先導的な役割を果たした（付録資料 45-49 を参照）。
- (2) 1956 年（昭和 31 年）8 月 8 日に、児玉教授が置戸町教育長の小林博氏に宛てた発掘調査の申し入れ願（付録資料 36）は、この学術調査が町の公式な許可を得た組織的調査であったことを示している。町からも発掘調査に対する経費が支弁されている（付録資料 42）。
- (3) 発掘区内の遺物出土状況からも、地表面近くの暗い土（表土）や、石器の出土する明るい土（褐色層？）が判別できる（付録資料 10-30 を参照）。
- (4) 「中里左台」というラベルが付随する遺物箱もあり、これは田付遺跡などの墓地の沢川の右岸沿いの台地から得られた資料であると考えられる。本カタログには掲載していない。

引用文献（新聞記事の出典は本文中に記載）

- 大場利夫 1957 「先史時代史」『置戸町史』、置戸町史編纂委員会編、置戸町役場、13-23 頁。
- 大場利夫・松下 亘 1965 「北海道の先土器時代」『日本の考古学 先土器時代』杉原莊介編、河出書房、174-197 頁。
- 置戸町史編纂委員会 1957 『置戸町史』、置戸町役場。
- 島田和高・山科 哲 1998 「明治大学考古学博物館収蔵資料（旧石器時代）の再検討・再評価―北海道置戸安住遺跡 B・C 地点の細石刃製作工程と遺跡での作業内容―」『明治大学博物館研究報告』3 号、23-67 頁。
- 戸沢充則 1967 「北海道置戸安住遺跡の調査とその石器群」『考古学集刊』3 巻 3 号、1-44 頁。
- 藤川尚位 1959 「置戸遺跡出土の擦痕石器の実例と細石核について」『先史時代』9 号、14-21 頁。
- 北海道教育委員会 2017 北の遺跡案
内、<http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bnh/kitanoisekiannai.htm>。（2017 年 8 月 10 日アクセス）